

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第45集 (2013年度) 2014年3月発行：111-125

国際化・グローバル化に関する高等教育文献の枠組と考察

北 垣 郁 雄

国際化・グローバル化に関する高等教育文献の枠組と考察

北 垣 郁 雄*

1. はじめに

日本において、高等教育の国際化やグローバル化が、しばしば話題に上る。技術の発達を一因とする時代の流れと考えられるが、「国際化・グローバル化」の概念範囲が広く（塚原，2008；山上，2012），その関心対象が多様化しているのが現状である。多義的といえる。

本研究では、比較的最近刊行された、国際化・グローバル化にかかわる高等教育関連の出版物を参考にして、その枠組化を試みる。その枠組に対して関連出版物を位置付けることにより、当該文献が主眼とする力点をより詳細に特徴づけることができる。さらに、文献ごとの特徴を比較することにより、関心の対象の偏りや全体的傾向を視覚的に表現することができる。すなわち本研究の目的は、日本で関心が持たれている国際化・グローバル化関連の高等教育文献の枠組を求めることである。具体的には、調査対象としての素材を、日本語で記述された出版物（または和訳された出版物）に限定している。

本稿は、国際化とグローバル化の概念的相違を課題とするものではないが、これらの用語について、簡単に考察しておきたい。佐藤（2012）によれば、国際化は1980年代から始まった。これに対し、グローバル化は今世紀に入ってからその概念が定着した（濱口，2010）。米澤（2012）は、日本の大学の海外における通用性の観点から、グローバル化への対応を論じる手法を採っている。また、猪木（2009）は、「大学の『国際化』は人材の国際的な流動化である」とする。これらの事例も含めると、さきの2用語に関する解釈は多々存在するものの、国際化は、時期的により早く用いられたこと、教育研究の関心を国外にも向けるべきとの越境的文脈で使用されること、などの特徴をもつ。一方、グローバル化は、情報通信による経済的越境システムの発達に由来する概念と言える（佐藤，2012）とともに、人やモノの国外での通用性に着眼するときに用いられる用語と言える。

このように、一国と他国を相違的関心の意識下で比較し論じようとするときに「国際化」が用いられ、同じく共通的関心の意識下で論じようとするときに「グローバル化」が用いられる傾向がある。したがって、異文化交流は「国際化対応」の範疇となり、学力の国外での通用性に着眼した企画例えばJABEEなどは「グローバル化対応」の範疇となる。またそのような見方の下では、外国語学習は国際化対応意識の下に企画されたカリキュラムと呼べるし、世界共通のICT（Information and Communication Technology）システムはグローバル的意識の下で標準化された仕様と呼ぶことができる。

* 東京都市大学客員教授／(株)メディアみらい代表

つまり、複数国が関与する対象テーマであっても、相違的関心か共通の関心かの意識の置きどころによって、「国際化」にも「グローバル化」にもなり得ると考える。

2. 研究方法

これまでに公開された文献やそこに付与されたキーワードの情報を参考にして、枠組を作る。既存の情報をそのまま利用するため、情報の不足や不整合が多々発生し得る。

このような場合、定量的に処理し分析するのは困難なことが多い。本研究では定性的な手法を採るとともに、信頼性の担保に向けて多面的なアプローチを試みる¹⁾。研究対象の具体性や個性に即して分析することになり、自ずと、分析者の主観を許すことになる。このとき、分析結果の信頼性を高めるには、次の方法が考えられる。

1. 1人の分析者が、複数のアプローチを採り、分析結果を照合する。
2. 特定の一情報源を、複数の分析者が個別に分析し、その結果を照合する。

上記2では、同一の問題意識をもつ分析者を複数必要とするが、その場合、意識の持ち方が同一であるか否かの検証が困難であるという新たな課題に直面する。本研究では、後述のように研究目的に向けて複数のアプローチを採り得るので、上記1の方法を採る。文献検索は、必要に応じて国立国会図書館の蔵書検索システムNDL-OPACを用いる。文献の発行期間は、2001年～2012年とした。今回のNDL-OPAC検索では、文献の種類として、【図書】、【記事】、【博士論文】が設定されている。【図書】は単行本に該当する。【記事】は単行本と博士論文以外の文献であるが、具体的にはいくつかの資料を集めた資料集を含む。例えば、IDE大学協会発行の「IDE現代の高等教育」がこれに該当する。

このシステムの活用を含め、本研究では以下の2つのアプローチを利用して「高等教育の国際化・グローバル化」の枠組を作る。

1. 文献内容調査 — NDL-OPAC検索で、「高等教育」「国際化」「グローバル化」に準ずるタイトルの文献を求める。そして、目次や内容を調査する。
2. キーワード調査 — NDL-OPACで、「高等教育」と「国際化またはグローバル化」のキーワードの組み合わせで文献検索する。そして、各文献のキーワードを集計して枠組化を図る。

このうち、1では、特定の文献内容を分析対象とするので、著者または編集者の一貫した意図を読み取ることができる。しかし、その個人の意図に依存する度合いが高くなる。一方2では、著者の主要な意図がキーワードに表現されているといえる。しかし、キーワードを付与する際、NDL-OPACでは、所与のキーワード集から所定数を選択するという方法を用いていない。したがって、キーワードの選び方に偏りを生じたりキーワードの数にバラツキが生じるなどの不都合があり得る。

いずれの方法も不完全さを残す。しかし、単行本や資料集では、ふつう内容のバランスに充分配慮して編集するので、目次等の参照で、より整合性のある枠組を制作できることが期待される。そこで、本研究では1の方法を主とし、2の方法を従として作業を進める。そして、著者や編集者個人への依存度を減らすため、複数の著作物を分析の対象とする。

以上のように、本研究では、所望の枠組化作業を複数の著作物の内容調査とキーワード調査に基づいて行うことにより、研究調査の多面性を担保することにした。

実際の枠組化作業では、それに資するいくつかの概念用語の包含関係や各用語の選定に充分なる配慮が求められる。その作業の性質上、作業の厳密な手続きを時系列的に明記することは難しい。諸作業を同時並行的に進めたり実施済みの作業を見直したりするなど試行錯誤の作業となるが、概ね、次の数点に留意して作業を進める。

- ・国際化／グローバル化を扱った高等教育のどの文献も、枠組の中のどこかに当てはめることができるような設計とする。
- ・過度に抽象的（または具体的）な用語を避ける。また、2～3の階層構造を持たせる。
- ・一つの階層内の2つの用語は、極力包含関係とならないよう設計する。

3. 枠組の作成

枠組化の制作作業は、文献の内容調査とキーワード調査の結果を適宜参照しつつ、ほぼ同時並行的に進めた。NDL-OPAC 検索の結果、分析対象としての文献として、資料集としてはIDE 現代の高等教育「国際競争時代の大学」(No.507, 2009)、同じく「大学にとってのグローバル化」(No.540, 2012)を選択した²⁾。単行本としては塚原編(2009)を選択した。これら3つの調査結果に基づいて枠組作成を進めた。完成した枠組を表1に示しておく。その最上行に示したとおり、大分類—中分類—事例の3つの階層を持たせている。

以下、「開発した枠組」、「文献内容調査結果」および「キーワード調査結果」を説明する。

開発した枠組

以下に、表1の各概念用語を説明する。

3.1 人

—移動：外国人教員、海外滞在したことのある教員、海外からの留学生、海外への留学など、国境を越えて移動する教員や学生に関する話題である。ボローニャ宣言以降のヨーロッパにおける学生の流動に関する話題もこれに含まれる。

—資質：大学教員の役割、資質開発、JABEE 等学力の国際的通用性に関する話題である。

—活動：外国大学との共同研究、国際学会での活動に関する話題である。

—意識：国際競争時代に向けた意識改革、学生の内向き志向への対応に関する話題である。

3.2 モノ

—制度・政策：外国で取得した単位の読み替え制度、外国大学との協定に関する話題や当該制度・政策に内在する戦略的課題である。

—組織・戦略：海外からの留学生に適切に対応するために、新たな部門を新設したり、既存組織を再編したりするような話題や組織の戦略的課題である。

—教育・研究：英語による授業や会議、海外研究者を含めてプロジェクト研究を進めるような研究

活動拠点、グローバル人材を育成するためのカリキュラムなどの話題である。

—ICT：ICT（Information and Communication Technology）を援用した海外大学との交換授業や異文化交流授業、同じく海外からの大学院入学希望者に対するICT援用面接に関する話題である。

—財政：学生への給付金やローン、授業料、大学の財政に関する話題である。

3.3 情報

—成果：研究業績を国際比較するための論文数と論文の被引用数、大学の教育力や就職率に関する話題である

—実態：この項目は、他の項目との組み合わせとして機能する。例えば、外国人教員比率を国際比較するときは、「人—移動」と「情報—実態」の組み合わせとなる。そして、定量的な比較が関心の対象となる。

—指標：この項目は、他の項目との組み合わせとして機能することが多い。例えば、大学ランキングには、いろいろな指標があるが、その検討は「情報—成果」と「情報—指標」の組み合わせによる。実際、英国の高等教育専門誌によるもの、上海交通大学によるもの、Quacquarelli Symonds社によるものの特徴が比較される（米澤、2012）。

3.4 メタ情報

—枠組：高等教育の国際化やグローバル化の概念をモデル化したり、それらの概念を具体化したりするような話題である。

表1 「高等教育の国際化・グローバル化対応」の枠組

大分類	中分類	代 表 的 事 例
人	移動	教員、学生
	資質	大学教授職、学力
	活動	共同研究、学会発表
	意識	自己啓発、内向き志向
モノ・金	制度・政策	単位互換、海外協定校
	組織・戦略	部門新設、再編、運営
	教育・研究	英語化授業・コミュニケーション、学術活動拠点、人材育成カリキュラム、質的保証
	ICT・技術	遠隔式の異文化交流授業、ICT援用入試面接
	財政	授業料、奨学金、運営費、競争的資金
情報	成果	研究業績、教育業績、教育環境
	実態	定量比較、定性比較、文献参照
	指標	複眼評価、比較の方法、基準作り、基準の解釈
メタ情報	枠組	モデル造り、概念規定、整理、まとめ
	課題	問題提起、解釈、展望
	経時	発展の経緯、歴史的展開
	地域	EU圏、東アジア、格差

一課題：高等教育の国際化やグローバル化に関しての、現状、体制、今後の課題などに関する話題である。

一経時：システムレベルでの審議会や機関レベルでの委員会等で、高等教育の国際化やグローバル化に関する施策や活動がどのように進められてきたのか、その歴史的経緯に関する話題である。

一地域：特定圏内固有の話題や、場所に差によるサービス格差に関する話題である。

文献内容調査 1—資料集・IDE「現代の高等教育」の表1への対応—

表1の枠組に対して、比較的最近、高等教育の国際化・グローバル化を扱った文献に関し、枠組への対応を図る。ここでは、高等教育の関係者、社会人、機関等を対象にして、国際化・グローバル化を著した文献として、高等教育専門誌であるIDE「現代の高等教育」を取り上げる。そして、過去4年間の刊行の中から、13件を分析の素材とした。以下は、各文献のあらましを述べるとともに、それを表1と照合する。

(1)「グローバル化の中の大学」(佐藤, 2012)

1980年代から始まった「国際化」の動きから最近の「グローバル化」へ視点を移してきた歴史的経緯を述べている。その上で、人材の流動化以外にもグローバル化の結果としておこった現象として、大学間の協同と競争、新しい大学運営の進展、大学運営関係者の多様化をとりあげている。執筆者自身が述べている通り、この文献では、大学の運営を巡って大学とグローバル化とのかかわりに主眼を置いている。また、国際標準という枠組の中で、教育の達成状況の重要性を取り上げ、AHELO (Assessment of Higher Education Learning Outcomes) を例に挙げていかなる能力の養成が求められるかを論じている。

以上の概要から、この文献は、表1のモノー組織、モノー教育研究、メタ情報—経時、メタ情報—課題に対応する。

(2)「学生の国際流動」(杉村, 2012)

学生の国際流動の活発化とその多様化に焦点を当てている。学生の国際流動の今日の特徴を、特にその急増が目立つアジア系留学生の動向を中心に整理し、国際流動のもとでの「国際高等教育」の役割と、日本の高等教育の課題について考察している。労働人材の移動との相関や流動の多様化の実態を統計的にまとめている。

以上の概要から、この文献は、表1の人—移動、情報—実態、メタ情報—課題に対応する。

(3)「学生交流の国際的動向」(横田, 2012)

途上国の経済発展に伴い、留学に新しい波が押し寄せているとし、中国、韓国、豪州におけるその現況を統計量に基づいてまとめている。それらを含む世界の潮流の中で、日本がどのような事態にあるのかを整理している。そこでは、18歳人口の減少が間接的に留学生の受入に影響していることを窺わせている。それとともに、企業の国際人材ニーズと大学の供給力とのミスマッチを述べ、社内での英語化コミュニケーションや新興国市場で即戦力となる人材育成の問題を述べている。さらに、留学生受入には、震災や原発事故といった現実の問題を避けて通れないという問題があることを指摘している。

以上の概要から、この文献は、表1の人—移動、情報—実態、メタ情報—地域に対応する。ただし、高等教育固有の課題とは言えない事柄または背景的事柄（18歳人口の減少、労働市場、震災等）は表1では表しにくい。

(4) 「グローバル化と世界大学ランキング」(米澤, 2012)

ランキング指標としてしばしば話題となる3つをとりあげている：英国の高等教育専門誌 Times Higher Education (THE), 上海交通大学の Academic Ranking of World University (ARWU), および Quacquarelli Symonds (QS)。そこでは、各大学の総合ランキングを算出するための指標と重みづけを述べ、各指標における日本大学の実態を示している。それとともに、世界大学ランキングが指標として不十分な点があることを述べている。

以上の概要から、この文献は、表1の情報—指標、情報—成果、情報—実態に対応する。

(5) 「大学教育の国際化—工学系の場合—」(岸本, 2012)

大学教育の国際的通用性という観点から、工学系教育をとりあげる。その教育プログラムの適格認定に関し、2001年の JABEE の設立の経緯を述べ、2012年に基準改訂に伴い International Engineering Alliance が2009年に策定した Graduate Attribute を参考にして、学修・教育到達目標としてどのような指標を含めたかをまとめている。また、OECD の発案による高等教育における学習成果アセスメントの企画をとりあげ、その中で日本の役割を述べている。

以上の概要から、この文献は、表1のモノ—制度、モノ—教育研究、情報—指標、メタ情報—経時に対応する。

(6) 「国際化と学位の質保証」(石橋, 2012)

著者はグローバル人材を世界に通用し活躍する人材ととらえ、その人材の質を学位とする。学位の定義を述べ、国際共同学位としてのジョイントディグリーとダブルディグリーの相違やダブルディグリーの運用時の課題を論じている。

以上の概要から、この文献は、表1のモノ—制度、モノ—教育研究に対応する。さらには、学位に関する法律や答申の経時的展開を述べているので、この部分はメタ情報—経時に対応する。

(7) 「大学の国際的開放度」(山上, 2012)

最初に国際化やグローバル化が多義的であることを指摘する。グローバル時代において企業が海外に出ていく現状において、何が大学に求められるかの自覚が必要性を述べるとともに、著者自身の考えも述べている。留学生の送り出しと受け入れがそのまま進むとどうなるかの因果を定性的に予測している。また留学生の統計的実態を記述し、大規模大学ほど送受とも割合が低く、それが構造的な原因に依ることを述べている。地方大学で、留学生の送り出し比率の高いものがあり、各地域における存在感との関連を述べている。

以上の概要から、この文献は、内容が多岐にわたるが、表1の人—移動、モノ—組織、情報—実態、メタ情報—課題に対応する。企業のグローバル的な活動、留学による人間形成など表1ではとらえきれない部分がある。

(8) 「激動する世界の高等教育」(金子, 2009)

21世紀初めの10年間における発展の軸を、質的高度化・多様化、市場化、グローバル化の3つと

している。高等教育のグローバル化として、アメリカとイギリスを中心に留学生の流動的・経時的特徴をまとめるとともに、国家戦略としての留学生政策、大学経営戦略としての国際化の様相を述べている。

以上の概要から、この文献は、表1の人—移動、モノ—組織に対応するとともに、留学生に関する統計量をも参考にしているのので、情報—実態にも対応する。

(9)「世界の中の日本の大学」(佐藤, 2009)

高等教育への進学状況を、高等教育プログラムの大学型/非大学型の区分けに基づいて国別に統計比較するとともに、話題を日本に移して、質の確保に関する答申等の経緯や分野別進学率をまとめている。また、教育財政の国別の特徴を述べ、欧米におけるグローバリゼーションに伴う越境的活動や国際的協力の枠組みをまとめている。

表2 表1への当てはめ事例

大分類	中分類	調査した文献の番号												
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)
人	移動		○	○				○	○	○	○	○		
	資質													
	活動													
	意識													
モノ・金	制度・政策					○	○			○		○		
	組織・戦略	○						○	○	○				
	教育・研究	○				○	○				○			
	ICT・技術													
	経済・財政													
情報	成果				○									
	実態		○	○	○			○	○		○			
	指標				○	○					○		○	
概念	枠組												○	
	課題	○	○					○			○		○	○
	経時		○					○	○			○		○
	地域				○						○	○		

以上の概要から、この文献は、関心が多岐にわたるが、強いて言えば、表1の人—移動、モノ—制度、モノ—組織、メタ情報—地域に対応する。

(10)「大学の国際競争と日本の対応」(白井, 2009)

科学技術を中心とする国際競争として、第一に実体経済に対応する部分の国際競争を挙げ、科学技術の基礎に成り立つ新しい技術やサービスを円滑に事業化するベンチャー育成の必要性を述べている。第二に、グローバル社会の根本的な変化に対応できるような大学の教育の在り方を意識化し

ている。また、大学ランキング指標をまとめ、教員や学生の流動性を述べている。全般に、グローバル時代における大学の課題をマクロにまとめている。

以上の概要から、この文献は、表1の人—移動、モノ—教育研究、情報—実態、情報—指標、メタ情報—課題に対応する。

(11) 『『留学生30万人計画』のために』(木村, 2009)

国際的競争力の高さを国際的なプレゼンスの高さとみなし、英国の一流誌タイムズで毎年取り上げられる大学ランキングで、全学生に占める留学生の割合と全スタッフ中の外国人スタッフの割合の重要性を述べている。また、平成15年中教審答申の概要をとりあげ、さらに平成20年度答申の概要をまとめている。そして、東アジア、欧米先進諸国、アフリカ・中東諸国・中央アジア地域等の地域別に留学生の実情や対策を述べている。

以上の概要から、この文献は、表1の人—移動、モノ—制度、概念—経時、メタ情報—地域に対応する。

(12) 「国際競争時代の大学」(小宮山, 2009)

大学ランキングは、「時代の先頭」に立つことと「世界の知の頂点」に立つことを重視すべきとする。それに向けて、執筆者が取り組んできた事柄をまとめている。第一は、大学の基礎的体制の強化である。そのために、大学内の自律分散協調系と知の構造化を必要としている。第二は、大学内の国際化の達成である。そのために、奨学金制度や入学制度の整合性の必要性を述べている。第三に、国際的連携の強化を挙げる。国内外の大学との連携により、グローバルな課題解決を図る必要性を強調する。

以上の概要から、この文献は、執筆者自身の理念を中心に述べており、メタ情報—枠組、メタ情報—課題、情報—指標に対応する。

(13) 『『第三の開国』と大学の新たな使命』(安西, 2009)

現代世界の急激な構造変化が、明治維新による第一の開国、敗戦の戦後改革による第二の「開国」に匹敵するという。しかし、第三の「開国」はそれ以前のような制度的に明示された変化ではない。福沢諭吉の時代や講述を参考にしつつ、グローバル化する世界と大学の役割をまとめ、現代の大学の使命を述べている。その中で、よい大学には世界中からよい学生や教員・研究者が集まるという単純なこと、グローバル社会の先導者たるべきという理念をいかにして教育・研究に結び付けるのが重要であるとする。

以上の概要から、この文献は、歴史を顧みつつ、それに現代社会を当て、独自の視点でこれからの大学の在り方をまとめており、結果的に内容が多岐にわたる。強いて言えば、メタ情報—課題、メタ情報—経時に対応する。

文献内容調査2—単行本・「高等教育」塚原編(2009)と表1への対応—

塚原編(2009)は、NDL-OPACで「高等教育 and 国際化」のキーワードで抽出された図書である。その目次の中から高等教育に関連のある名詞をキーワードとみなした。その表1への対応を表3に示す。キーワード欄の括弧内は表1で対応する用語を示している。表3において、「知識社会」「市場化」

は、高等教育研究においては頻出する用語と思われるが、社会的背景を形容したものであるため、表1には対応させていない。

表3 塚原編（2009）の目次分析

目次構成	キーワードかつこ内は表1に示した用語ー
第Ⅰ部 高等教育システム	大学組織（組織）、質的保証（教育・研究）、市場化、eラーニング（ICT）、格差の是正（制度）
第Ⅱ部 大学教育	学力評価（教育）、初年次教育（教育）、エンゲージメントとアウトカム（教育）、知識社会、職業（教育）
第Ⅲ部 研究と社会サービス	フンボルト理念（教育・研究）、大学教授職（教員）、研究パフォーマンス（研究）、産学連携（研究）
第Ⅳ部 大学評価	大学評価（教育・研究）
第Ⅴ部 大学の管理運営	選択と集中（戦略）、IR（組織、戦略）

キーワード調査

1. 先の文献調査と並行して、既述のNDL-OPACを用いて、以下のキーワード検索を行った。

[検索1]

検索キーワード：高等教育 and 国際化

資料の発行期間：2001年～2012年

資料種別：【図書】、【記事】、【博士論文】（NDL-OPACが指定した種別の中から選択）

検索数は123、そのうち【図書】が20、【記事】が102、【博士論文】が1である。

[検索2]

検索キーワード：高等教育 and グローバル化

表4 NDL-OPACシステム検索による高等教育文献（一部）

文 献	キーワード（表1の用語）
嘉悦 康太（2010）	教育投資（財政）、公財政支出（財政）、私学助成（財政）
大滝 純司（2009）	医学教育（教育）、教育改革（教育、制度）、研究開発（研究）
田林 葉ほか（2009） ³⁾	英語教育（教育）、ライティング（教育）、社会実践（教育）、専門教育（教育）、政策科学（教育）
平田 純一（2009）	大学院留学生（移動）、市場経済移行国、入学前教育（教育）、国際標準の教育研究指導（教育・研究）
吉田 文（2006）	質の保証（教育・研究）

資料の発行期間：2001年～2012年

資料種別：【図書】、【記事】、【博士論文】（NDL-OPACが指定した種別の中から選択）

検索数は87、そのうち【図書】が21、【記事】が66である。

2. 検索1と検索2の結果をマージした。それらの重複データを処理して、総データ数195、【図書】

32, 【記事】162, 【博士論文】1を得た。総データのうち、キーワードが付されたものは以下のとおりである。

【図書】：2

【記事】：33

上記文献の付されたキーワードをまとめたものを表4に示す（紙面の都合で、一部のデータのみを示している）。そこでは、高等教育、国際化、グローバル化を表すキーワードと英文キーワードを削除するなどの編集を行って示している。

4. 考察と今後の課題

前節では、13の文献を表1に照合して、表2を求めた。本研究での分析作業は、つぎのようにまとめることができる。

第一に、表2より、高等教育の国際化（またはグローバル化）を扱った文献が、どの項目に重点を置いているかを一瞥に判断することができる。その文献をこの表に照合しまとめることにより、全体として、重点の置き方の偏りがあるかないかを知ることにも可能になる。また、同じ「高等教育の国際化（またはグローバル化）」であっても、互いに似通った文献とそうでない文献を区別することができる。つまり、表2を素データとしてクラスター分析を行うことができる。したがって、本研究の分析法により、「高等教育の国際化（またはグローバル化）」の上位概念を求める研究につながることを期待される。

第二に、前節で述べた各文献のあらまし、それと表1との照合や枠組化に資する用語の作成は、筆者自身が主観的に行ったものである。恣意性を軽減するためには、複数の分析者の結果を照合するという方法がある。またそれによって、分析者による相違を読み取ることもできる。その相違分析の結果は、表1の分類法を改善するのに役立つことが期待される。

第三に、今回の枠組化では、大学の組織、構成員、情報を中心にしてその作業を行った。そのため、市場化、知識社会といった高等教育研究で頻出する用語であっても、社会的背景に関するものは含めなかった。背景的要素を含めた統一的な枠組化は、今後の課題である。

第四に、本研究では、結果的に、求める枠組が各号ごとに特集を組む「IDE 現代の高等教育」に大きく依存することとなった。このような特集では、「高等教育の国際化（またはグローバル化）」という一つのテーマに対してどのような執筆を求めるかが、編集サイドによって定められる。つまり、前節の(1)～(6) および(7)～(13)に対する表1の結果は、編集の意図が多分に含まれていると考えるのが自然である。文献の独立性の存否を考慮しつつ、表2の結果を觀賞することが望まれる。

第五に、表2では、該当する分類項目に○を付したが、○の数が比較的多い文献と少ない文献が存在する。これに対して、文献ごとに同一のポイントを与え、そのポイントを該当する分類項目に割り振るといった方法もある。そして、この方法を用いるほうが、文献をより公平に扱っているようにも思われる。これは、今後の課題としたい。

第六に、「高等教育 and グローバル化」の組み合わせキーワードの検索で、増淵（2010）の単行

本が抽出された。高等教育にかかわる多くの背景的要素を連携させながらグローバル化時代の高等教育の在り方を縦横に思考する教育学の基礎論と思われ、表1の枠組に組み込むことができなかつた。さまざまな様式の文献の存在を考えると、表1の枠組は、その使用限度に配慮すべきと思われる。

第七に、今回は2001～2012年に発行された高等教育の文献に限定して分析を行った。高等教育研究は、比較教育研究等との重複部分も多いので（山内ほか，2013），今後隣接分野を含めた枠組の検討も必要と思われる。

第八に、表2では○のついていない中分類項目がいくつか存在する。そこで取り上げた13の文献には存在しなかつたが、表3、4をも参照すれば中分類のICT・技術、経済・財政に該当する文献が存在することがわかる。また、本研究で取り上げた文献には、中分類の資質に該当する文献が存在しなかつたが、有本（2011）の文献は「（教員の）資質」に該当するものと言えよう。

第九に、表1の枠組は、「科学技術」に関する新たな考察の下に、いずれ改造が必要になるだろう。それは、高等教育を取り巻く主要な背景、例えば知識社会、国際化、グローバル化は、科学技術の進展が主要な原動力として機能していると思われるからである（図1）。

知識社会は、科学技術の進展がそのインフラの基礎をなしている。国際化は、飛行機技術の発展、その量的拡大と移動費の低廉化がより適切な人的資源配分や自発的流動化を促した結果であろう。グローバル化は、情報通信技術が世界共通のプロトコルで若干のカスタマイズによりどこでも稼働可能なシステムを提供できたこと、そしてそのシステムを通して場所を問わず即座に知の共有を図ることができたこと、などがその誘発要因であろう。

高等教育の現況を科学技術という視座に求めようとする研究が少なく、国際化・グローバル化時代の高等教育研究の今後の課題と思われる。

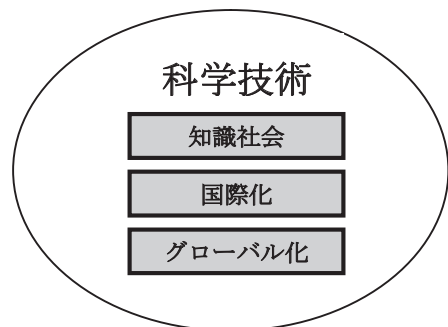


図1 高等教育を取り巻く状況

【注】

- 1) 量的アプローチに対して、質的アプローチがある。もともと社会学や人類学で用いられ、狭義には脱実証的な研究方法とされ、多面的に分析する、研究者の主観を排さない、などを特徴とする。本研究における多面的分析は、質的アプローチに準じるものである。
- 2) 特定大学における国際化・グローバル化対応を紹介することにウェイトを置いた文献は、分析の対象から外した。
- 3) 田林（2009）による「英語教育の国際化—政策科学部学士課程における実践型英語ライティング」というタイトルの文献であり、主タイトルが教育に関するものであるため、サブタイトルにある「政策科学」「社会实践」はいずれも「教育」に対応すると判断した。

【参考文献】

- 有本章（2011）『変貌する世界の大学教授職』玉川大学出版部。
- 安西祐一郎（2009）「第三の開国」と大学の新たな使命『IDE 現代の高等教育』No.507, 38-42頁。
- 石橋晶（2012）「国際化と学位の質保証」『IDE 現代の高等教育』No.540, 33-36頁。
- 猪木武徳（2009）『大学の反省』NTT 出版。
- 大滝純司（2009）「医学教育改革と医学教育学領域の研究」『東京医科大学雑誌』第67巻, 第3号, 275-282頁。
- 嘉悦康太（2010）「高等教育におけるグローバル・スタンダードと日本の私学助成」『嘉悦大学研究論集』第52巻, 第2号, 41-76頁。
- 金子元久（2009）「激動する世界の高等教育」『IDE 現代の高等教育』No.507, 4-10頁。
- 岸本喜久雄（2012）「大学教育の国際化—工学系の場合—」『IDE 現代の高等教育』No.540, 28-32頁。
- 木村孟（2009）「「留学生30万人計画」のために」『IDE 現代の高等教育』No.507, 27-31頁。
- 小宮山宏（2009）「国際競争時代の大学」『IDE 現代の高等教育』No.507, 32-37頁。
- 佐藤禎一（2009）「世界の中の日本の大学」『IDE 現代の高等教育』No.507, 11-15頁。
- 佐藤禎一（2012）「グローバル化の中の大学」『IDE 現代の高等教育』No.540, 4-9頁。
- 白井克彦（2009）「大学の国際競争と日本の対応」『IDE 現代の高等教育』No.507, 16-21頁。
- 杉村美紀（2012）「学生の国際流動」『IDE 現代の高等教育』No.540, 10-16頁。
- 田林葉・西出崇・宮浦崇他（2009）「英語教育の国際化—政策科学部学士課程における実践型英語ライティング」『立命館高等教育研究』第9号, 109-124頁。
- 塚原修一（2008）『高等教育市場の国際化』玉川大学出版部。
- 塚原修一編・広田照幸監修（2009）『高等教育：リーディングス 日本の教育と社会12』日本図書センター。
- 濱口道成（2010）「グローバリゼーションの中の大学」『IDE 現代の高等教育』No.518, 2-3頁。
- 平田純一（2009）「大学院留学生の入学前プログラムの開発—現状と課題」『立命館高等教育研究』第8号, 77-91頁。
- 増渕幸男（2010）『グローバル化時代の教育の選択：高等教育改革のゆくえ』上智大学出版。
- 森玲奈（2012）「第6章—質的調査法」清水康敬ほか編著『教育工学研究の方法』ミネルヴァ書房, 99-118頁。
- 山内乾史・南部広孝（2013）「比較教育研究と高等教育研究」『高等教育研究』第16集, 9-25頁。
- 山上浩二郎（2012）「大学の国際的開放度」『IDE 現代の高等教育』No.540, 37-42頁。
- 横田雅弘（2012）「学生交流の国際的動向」『IDE 現代の高等教育』No.540, 17-21頁。
- 吉田文（2006）「グローバル化するeラーニング—市場原理と国家の交錯」『教育学研究』第73巻, 第2号, 125-136頁。
- 米澤彰純（2012）「グローバル化と世界大学ランキング」『IDE 現代の高等教育』No.540, 22-27頁。

A Framework of “Internationalization and Globalization in Higher Education” and Its Consideration

Ikuo KITAGAKI*

Internationalization or globalization is currently a much discussed topic in higher education. These words however, represent a rather wide concept thus interest in them varies widely for example the awareness among professors and/or students; the ratio of foreign professors or foreign students; university ranking worldwide; quality assurance worldwide, and so forth. It is difficult to identify the object of interest due to the vagueness of these words in higher education.

Thus we developed a framework of “Internationalization and globalization in higher education” citing recently published materials relating to the topic and keywords attached to relevant materials. Assembled materials consisting of essays devoted to the topic internationalization and/or globalization and an academic book of the same field served as the objects for the survey. On the other hand, we used the NDL-OPAC database system run by the Japan National Library to retrieve the materials having keywords related to higher education and either of the two aforementioned keywords. Many keywords were found attached to the materials which were used for to create the framework. Also consideration is given to the task which will have to be conducted to complete the framework.

* Guest Professor of Tokyo City University / Media-mirai, Inc.